

聖書日課

# みちのひかり

2025

9月

今月の聖句

「立ち帰って、生きよ」  
エゼキエル書 第18章32節



八王子キリスト教会

## 9月1日(月) 哀歌 第4章

これはエルサレムの預言者たちの罪のゆえ  
祭司たちの過ちのゆえだ。(13)

第4章は再び神の怒りの前にあるユダの姿について語り、かつての「純金」(1)が「土の壺」(2)に見なされるようになったとされています。こうした凋落の原因が「これはエルサレムの預言者たちの罪のゆえ／祭司たちの過ちのゆえだ。／彼らはエルサレムの中で正しき人々の血を流した」(13)と言われます。神の民を導いたのは、モーセやサムエルなどの神から遣わされた器でした。神からの器であるというのは、彼らの知恵が人からのものとは異なっているからで、その神からの知恵こそ彼らの支えです。預言者や祭司などがそれを告げる使命を担いました。それだけに、彼らがその重責において誤る時、その結果も重大でした。神の公正と正義がゆがめられ「正しき人々の血」が流されることになります(13)。民の命の尊厳を守るという指導者の使命が放棄されると、民は滅びます。神の裁きはこうした形で現されます。

人の言葉に巻き取られずに神の言葉を聞き続けることは必要でありつつ、同時に難しいことでもあります。そのために神はやがて、真の預言者、祭司として御子イエス・キリストをお与えくださり、まことの神の言葉を聞くことができるようにしてくださいました。それゆえに、この御子の言葉にこそ集中します。

主よ、人間の言葉とは異なる神の言葉を、御子のうちに聞き続けさせてください。

## 9月2日(火) 哀歌 第5章

主よ、私たちを御もとに立ち帰らせてください。  
／私たちは立ち帰りたいのです。／私たちの日々を新たにし／昔のようにしてください。(21)

他国民のものとされているエルサレムの状態が本章で語られます。第1章のエルサレムの荒廃がここでもう一度繰り返され、本章では復興を願う祈りにつながります。

復興についてこう祈られます、「主よ、私たちを御もとに立ち帰らせてください。／私たちは立ち帰りたいのです。／私たちの日々を新たにし／昔のようにしてください」(21)。「立ち帰らせてください」は悔い改めの心を語るものです。それは単なる反省ではなく、神のもとに帰ることです。そうすると「昔のようにしてください」(21)も、単にかつての繁栄したエルサレムの町並みへのノスタルジーではなく、《神のもとにあってこそそのエルサレム》という、根源的・原初的な懐かしさを語っていることになります。「日々を新たに」とは、原初の豊かな命を、再び日々新たに味わうことで、エデンにあったあのみずみずしい神との関わりと語らいに帰るといことなのです。私たちが帰るべきはこうした神との交わりです。しかも、神は私たちを試すような厳しい帰り道を用意されません。むしろ、神御自身が心から招き、私たちの帰りを待ちわびておられるのです。

主よ、自分の救いをあれこれと考えることを止めます。はじめにあったあなたとの豊かな関わりの中に帰ります。

## 9月3日(水) エゼキエル書 第1章

周りの輝きは、雨の日に雲の中に現れる虹の姿のようであった。これは主の栄光のような姿であった。私はこれを見てひれ伏した。(28)

エゼキエルは、バビロンを通しての神の審判とそこからの回復を、捕囚の最中、その地で預言します。新約のヨハネ黙示録の著者ヨハネになぞらえて「旧約のパトモスの預言者」とも言われます。文体もヨハネ黙示録に受け継がれるような、神の救済を表象を用いて絵画的に描写する黙示文体です。

1 節の「第三十年」は、ヨシヤの神殿改革から数えた 30 年のことです。つまり、それ以降の腐敗した神殿は神殿と認めず、神殿が失われたものとして数え「第三十年」というわけです。「祭司のブジの子エゼキエルに主の言葉が臨み、主の手が彼の上に臨んだ」(3)は、神殿は失われても、主は、今なお語り給うことを示します。

4 節以降の描写は黙示的で、不思議な光景が描かれます。「激しい風が北から吹いて来た」(4)は、バビロンを通してやってくる悲慘な歴史を暗示するものでしょう。「大きな雲と燃え続ける火」(4)の「四つの顔…四つの翼」(6)は、地の四方への神の全面的な関与を言い表します。その中に「全能者の声」(24)が響いています。「虹」(28)はノアへの約束の想起へと導きます。こうして、審判にも全能者の救いの御心が揺るぎなく貫かれていると告げています。

主よ、行われている事々があなたの救いの御手の中にあるを信じる信仰をお与えください。

## 9月4日(木) エゼキエル書 第2章

彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、私の言葉を語らなければならない。(7)

「彼らが聞こうと、反逆の家ゆえに拒もうと、自分たちの間に一人の預言者がいたことを知るようになる」(5)と、預言者が民に対して語ることの意義が告げられています。改めて知るのは、「彼らが聞こうと…拒もうと」と語られているように、神は人が聞くかどうかにかかわらず語り給うことです。聞くべき神の言葉は揺らぎません。エゼキエルに告げられる神の言葉を語る預言者にとって最も大切なことは、「主はこう言われる」(4)ということだと告げられます。その言葉が神の言葉に基づく真理かどうか、ということなのです。

「空気を読む」時代です。耳障りばかりが気にされ、それが真理かどうかは問われぬまま、ということも多くあります。真理の積み重ねで現されてくる確かなものよりも、当座の心地よさが重んじられ、結局崩れていくかに見えます。

エゼキエルに手渡された巻物について「表にも裏にも文字が書かれていた。書かれていたのは、哀歌と呻きと嘆き」(10)と言われます。自分たちに生じる崩壊とその原因の罪について、人は自分で悟ることも語ることもできません。そこから立ち上がらせるために、主は預言者を通して直言しておられるのです。

主よ、どうか、私が聞きたい言葉よりも、あなたが語りたいと思われる言葉を聞いていることができますように。

## 9月5日(金) エゼキエル書 第3章

私が立って、平野に出て行くと、そこに、主の栄光が、ケバル川のほとりで私が見た栄光のままとどまっていた。私はひれ伏した。(23)

エゼキエルは、イスラエルの人々に通じる言語で語るものの、その言葉が宿す神の御心は伝わらないままです。本当の意味で言葉が通じるとはどういうことかを考えさせられます。

どうして言葉が通じないかと言えば、「イスラエルの家はすべて額が硬く、心がかたくなだから」(7)、つまり心が通じていないからだと言われています。

主は、そのようなイスラエルに語るエゼキエルに「あなたの額も彼らの額と同じように硬くした。私はあなたの額を、岩よりも硬いダイヤモンドのようにした」(9)と言われます。額の硬さは頑なさを表しますが、イスラエルの頑なさに勝り、彼らを救うことを諦めない神の頑なさが、エゼキエルに与えられます。神が頑なに守り給うのは公正や正義で、これをゆるがせにした救いは考えられません。人に救いを与える主の栄光は、初めに「ケバル川」で見たとおり、今なお揺るぎません(23)。

「警告」(17~21)は厳しくとも、そこに滲む切々たる主の救いの御心に気づき、それを受け入れるところに、救いの道があります。

主よ、人の頑なさにまさる堅い意思をもって救いを進め給うあなたを感謝いたします。そこから語られるあなたの言葉ですから、受けとめ続けていることができますように。

## 9月6日(土) エゼキエル書 第4章

また自ら鉄板を取り、あなたと町との間の鉄の壁とし、顔を町に向けよ。こうして町は包囲される。あなたが包囲するのだ。(3)

エゼキエルは、一片のレンガをエルサレムの町に見立てた模型を包囲して預言します。彼が「鉄板」を挟んで相対するのは、その預言が何もかも触れることができない、神からの厳粛な真理であることを示します。

さらに、彼が左右それぞれの脇を下にして横たわり日を数えることで、イスラエルとユダ両王国のこれまでの過ちの年が数えられます。イスラエルの 390 年とユダの 40 年が何を意味するのかは、はっきりしません。両方を足すと 430 年で、かつてのエジプトでの苦役の年数(出 12:40)ですから、神の救出の恵みを忘れ、自ら苦しみのなかに帰って行ったと言っているのかもしれない。

寝返りが打てない姿勢(8)を取りながら、バビロンによってエルサレムが兵糧攻めに遭うことが示されます。エゼキエルが僅かな食事と水によってしのぐように、やがて飢えがやってくるのです。家畜の糞でパンを焼く困窮よりひどい、人糞を用いる極度の困窮が語られています。

神の恵みを無視した傲慢は、困窮に向かうしかありません。日の光一つとっても神の恵みです。それがなければ、私たちはたちまち困窮するはずですが、そのことを忘れやすいのです。

主よ、自分で生きているような傲慢さから救い出してください。本当は、あなたに担われて今日ここにあるのですから。

## 9月7日(日) エゼキエル書 第5章

エルサレムは諸国民よりも邪惡で、私の法に逆らい、周囲の国々よりも私の掟に逆らった。(6)

三分の一が疫病か飢餓で、三分の一は剣で、三分の一は剣に追われ離散すると、エルサレムの滅びについて語られます。その理由は、「エルサレムは諸国民よりも邪惡で、私の法に逆らい、周囲の国々よりも私の掟に逆らった。彼らは私の定めを拒み、私の掟に従って歩まなかった」(6)からだと言われます。人間の存立は神の法以外にないという峻厳さを思います。神に造られた私たちは、神を愛し隣人を尊重するという、神の法に従うのが自然であり当然なのです。言い換えれば、それに従わなければ、人間存在は必ず悲惨になるということでもあります。神学生の頃、約束の地の先住民の殲滅はその悪のゆえだと言う旧約の教授の言葉に呑み込みにくさを感じました。ここではその選民イスラエルが、悪のゆえに滅びるという裁きのもとに置かれます。神の定め峻厳さを思います。

赦され恵まれて当然ではありません。当然なのは神の戒めに聞き従うことです。そうできない人間のためには御子の十字架が必要でした。赦しは当然なのではなく、震えるほどの恵みなのです。赦されつつ、神と隣人を愛して歩む中に、本当の光がやってくるのです。

主よ、私の内にうごめく罪の恐ろしさに目を閉ざすことがありませんように。真剣に赦しを祈り、注がれる愛の真剣さに応えて生きることが出来ますように。



## 9月8日(月) エゼキエル書 第6章

あなたがたのうちの逃れた者は、連れ去られる先の諸国民の間で、私を思い起こすであろう。

(9)

「イスラエルの山々」(1)は「高き所」(3)が築かれたところです。高き所は、各地にあった、文字通り小高い丘で古い時代には主への礼拝もささげられましたが(サム上 9:13 他)、時代が進むにつれ土着の宗教との見分けが付かなくなり、偶像礼拝の場所を意味するようになります。

その誤った礼拝の成り行きを、「あなたがたが造ったものは消し去られる」(6)に見てよいでしょう。人間が造ったものは、人間を越えることはできません。むしろ誤った宗教的情熱の行き着くところは人身供犠で、エゼキエルはそれを、死体と骨のまき散らされるところとなると語ります(5)。人造の信仰は、救いも命も造れず、死と崩壊に行き着きます。

そうしたイスラエルの背信の中で、「私は、あなたがたのために、剣を逃れた者を国々の間に残しておく」(8)と、主はなお救いを造られます。「連れ去られる先の諸国民の間で、私を思い起こすであろう」(9)と言われるように、人間が造った祭壇と別のところで、主は救いを進めなさり、自分の背信を「嫌悪する」(9)という、心の動きに至ります。そして自分を嫌悪しつつも、その自分を愛して取り戻し給う神を知るような導きがあるのです。

主よ、地団駄を踏むように人間の罪と滅びを悔しがるあなたの愛(11)を、どうか深い悔い改めと感謝をもって受けとめさせてください。

## 9月9日(火) エゼキエル書 第7章

主の怒りの日には、銀も金も彼らを救えず  
飢えを鎮めることも、腹を満たすこともできない。(19)

繰り返される「終わり」が語るのは、バビロンによってエルサレムが陥落する終わりのことです。しかしまた、このことは、私たちの様々な終わりについても語り始めているようにも思います。

終わりは、12 節では売り買いの終わりにもなります。自分の財産を売るのは悲しみで、買うことは人生の実りを味わう喜びです。悲しみつつ売った人も、さらに努力して買い戻そうとします。そうした人間の世界を覆う売り買いが作る関わりがあり、そこに悲しみや喜びが<sup>う</sup>生じます。しかし、終わりにはそのいずれもが潰え去ると言われます。

売買の競争で優位に立って生き残りを図る私たちに、主はエゼキエルを通して「彼らは銀を通りに投げ捨て／金は汚れたものとなる。／主の怒りの日には、銀も金も彼らを救えず／飢えを鎮めることも、腹を満たすこともできない」(19)と言われます。富が自分の終わりを支えるように思うのですが、かえって「それが過ちのつまずきの石だった」(19)と言われます。こうして明らかになる「私が主であることを知るようになる」(27)ことこそが、本当に人を支えるものなのです。

主よ、終わりを支えるのがあなたであることを信じることによって、真の平安を得ることができますように。

## 9月10日(水) エゼキエル書 第8章

彼らは「主は我々を御覧にならない。主はこの地を見捨てられた」と言っている。(12)

イスラエルの礼拝の腐敗が語られています。

「妬みの像」(5、マナセ王の持ち込んだアシェラ)が神殿に悪影響を及ぼしているのだと言われています。〈妬み〉が単なる〈羨み〉と異なる点は、自分より下位であるはずの者が上位とされた時に抱く複雑な感情にある、と言えるでしょう。不当な上位者を憎みつつ上位を奪還しようとし、醜い競争心が生じます。持ち込まれた偶像は、物質の繁栄を約束するものです。「タンムズ」はバビロンの神で、死と再生の自然のサイクルを象徴します。豊穡をもたらす自然のサイクルを自分に呼び込み、人よりも優位に立てるようにと願う妬みの心が、その宗教に滲みまします。見捨てられているのではないか(12)という不安や焦燥感もまた妬みから生じる、その宗教に結びついたエネルギーです。「もっと繁栄を！」と求める貪欲に引き回され、今を感謝することを忘れさせます。これが熱っぽくも、なんとも落ち着かない、偶像を求める心です。

しかしまた、それらはあからさまではなく「おのおの暗闇の中で、自分の偶像の部屋で行っていること」(12)で、内なる偶像礼拝と言うこともできます。主の光に照らされなければ、それは隠れたままなのです。

主よ、本音にあることを、主の光の下にさらします。どうか、私の心の願いをきよめてください。

## 9月11日(木) エゼキエル書 第9章

町のただ中、エルサレムの中を行き巡り、そこで行われているすべての忌むべきことについて嘆き呻く人々の額にしるしを付けよ。(4)

神殿から偶像礼拝が取り去られる様子を描いています。「六人の男」(2)は、主の御使いと思われます。彼らに託された使命は、腐敗した神殿を打ち壊すことです。彼らの一人には「エルサレムの中を行き巡り、そこで行われているすべての忌むべきことについて嘆き呻く人々の額にしるしを付けよ」と言われます。そしてこのしるしが付けられた人には、滅ぼすために近づくなどと言われています(6)。このしるしは、真実な信仰を表すものです。つまり、「嘆き」と「呻き」が真実の信仰とされているわけです。

このことは大切です。神ならざる者が支配している世界で、真実な信仰に生きることは呻きと隣り合わせです。世界と人間の本来の姿を知らされているからこそ、そうなれない現状が見えてきて、嘆きが生じます。パウロも「私たちも…体の贖われることを、心の中で呻きながら待ち望んでいます。私たちは、この希望のうちに救われているのです」(ロマ 8:23,24)と言います。望みを知るからこそ、諦めず呻くのです。そこに聖霊と救いの御使が来てくださり、信仰のしるしを付けてくださいます。

主よ、なるべき世界、なるべき自分になっていません。どうか、嘆きつつもあなたに望みを置いていることができますように。それが信仰のしるしなのですから。

## 9月12日(金) エゼキエル書 第10章

それは、ケバル川のほとりで私がイスラエルの神のもとに見た生き物であった。私は、それらがケルビムであることを知った。(20)

第1章で語られていた幻で見たものが、この章の幻でもう一度出てきて、それが天的存在の象徴のケルビムであったと言われます。「ケルビムは神殿の南側に立っていて、雲が内庭に満ちていた」(3)と言われますが、この「雲」は、かつてソロモンが神殿を奉献した時、神殿内に満ちたものです(王上 8:10, 11)。4 節においてケルビムが神殿に入ること、改めて雲が記された上で、栄光(雲)が「神殿の敷居の上から出て」(18)去ります。つまり、神殿は建物や制度ではなく、全く単純に主の栄光がそこに留まるかどうかだ、と改めて示されているのです。

その上で、「それは、ケバル川のほとりで私がイスラエルの神のもとに見た生き物であった」(20)と言われます。ケバル川はバビロンにある川ですから、ゼカリヤがあゝの神殿から去った主の栄光を捕囚の地で目撃したと言っているわけです。神殿から去った主の栄光が、今も捕囚の民を追いかけ、その地に留まっているということなのです。

形あるものによって神を確かめようとすることは、形を失った時に全部を失ったと錯覚させます。しかし、主は形を超えて信ずる者に伴われるのです。

主よ、形あるものの崩壊を超えて、主が伴ってくださっていることを信じる信仰を強くすることができるよう。

## 9月13日(土) エゼキエル書 第11章

私は彼らに一つの心を与え、彼らの内に新しい霊を授ける。彼らの肉体から石の心を取り除き、肉の心を与える。(19)

エゼキエルが捕囚の地で見ている幻は続きます。本章は、エルサレムにいる「残りの者」(13)についてです。残りの者はイザヤでは、契約の担い手ですが、エゼキエルでは、単純にバビロン捕囚を免れユダの地に残留した人々のことです。その中の二人、ヤアザンヤとペラトヤが邪悪な計画を立てていることを、幻で見せられます。彼らの言う「家を建てる時はまだ来ない」(3)は、ユダの地に残留していれば、やがて自分たちが家を建てる日が来るという、甘い見立てのことようです。したがって「この町は鍋で、我々は肉」というのも、バビロン捕囚を免れてここに残った幸運な自分たちこそよいもの(肉)で、楽しみ(鍋)がやってくると期待する言葉のようです。一方預言は、その肉と鍋をエルサレムでの殺戮として語り直し(6, 7)、二人は剣に追い立てられ倒され、城内にいることすらできないと告げられます(9)。

幻は、それらを通して神が「私は彼らに一つの心を与え、彼らの内に新しい霊を授ける。彼らの肉体から石の心を取り除き、肉の心を与える」(19)という地点へと導いておられると告げます。「石」と「肉」は、頑な心と柔らかい心を表しています。

主よ、都合のよい見立てで自分を喜ばせるのではなく、柔らかな心で人の理解を超えるあなたの救いを信じていることができますように。

## 9月14日(日) エゼキエル書 第12章

その日々は近づき、すべての幻は実現する。(23)

これから生じるイスラエルへの裁きについて語られる言葉です。エゼキエルは、「あなたは捕囚の荷物を準備し、彼らの目の前で、昼のうちに捕囚の身となつて行け…そうすれば、彼らは自分が反逆の家であることに気付くであろう」(3)と主に告げられ、そのとおりにします。けれども、人々はそれに気づきません(9)。そこで改めて、「この託宣はエルサレムの指導者と、そこにいるイスラエルの家すべてに関わるものである」(10)と語ります。

この神の言葉の実現が信じられなかったのは、エルサレムの歴史はすでに長く、その繁栄の日々がずっと続くとしか思えなかったからです。22 節の「日々は延び、幻はすべて消えうせる」は、「今と同じ日々が続き、輝かしい日は来ず、彼らの幻想は実現しない」という意味でしょう。それに対して「その日々は近づき、すべての幻は実現する」と語られます。実現しない幻は、それが神からのものではない幻想だからです。しかし、真の幻は実現します。「主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。ある人たちは遅いと思っていますが、主は約束を遅らせているのではありません」(二ペト 3:8)神の言葉は必ず実現します。

主よ、変わらない日々でありつつも、裁きと救いの到来を見ている信仰の目をください。

## 9月15日(月) エゼキエル書 第13章

エルサレムに対して預言し、平和がないのに、エルサレムのために平和の幻を見るイスラエルの預言者たちよ (16)

偽りの預言者に対しての託宣です。主が遣わさなかったのに、「主の仰せ」(7)と語ることに對しての主の裁きです。彼らの様子は、「漆喰で上塗りをする」(10)と言われます。本来壁を築くにはレンガ同士を当時のセメントで接着すべきですが、そうせずに見かけ上きれいに上塗りをするだけなのです。「エルサレムに対して預言し、平和がないのに、エルサレムのために平和の幻を見るイスラエルの預言者たち」(16)と呼ばれています。当座の気休めの平和を語るのです。「心のままに預言」(17)は、心の弱さの表れです。重い現実に向き合えなくなっているのです。

人をなでるだけの言葉でも、それなりに人を捕らえるようで、「魂を捕らえようとするあなたがたの呪術のひも」(20)と言われます。鳥の罠のことのようです。そこにある危機が本当にわかれば、鳥は飛び立ち逃げますが、預言者が危機を語らないことで、「死んではならない者を死なせ」(19)てしまうのです。

批判そのものが嫌われる当世、必要な正しい批判はなかなか聞かれません。愛するがゆえに、危機を直言し、そこから救い出そうとする神の言葉に聴くべきです。

主よ、私の人生を歪めていることについて、あなたが語り給う時、素直に聞くことができますように。それが愛の言葉なのでから。



## 9月16日(火) エゼキエル書 第14章

立ち帰れ。あなたがたの偶像を離れて立ち帰れ。  
すべての忌むべきことから顔を背けよ。(6)

「心に偶像」(3, 4, 5, 7)が繰り返されます。  
これは、あからさまに家に偶像を安置するとか、  
偶像の宮に行くということではありません。「心  
に偶像を抱き、その過ちとなるつまずきを自分  
の前に置きながら、預言者のもとを訪れる者」  
(4)というのですから、自作の答えを持ったま  
ま、預言を聞くということです。そうすると、  
結局聞きたいことを聞いているだけで、預言者  
の言葉は意味を持つことはありません。その人  
々に「立ち帰れ。あなたがたの偶像を離れて立  
ち帰れ。すべての忌むべきことから顔を背けよ」  
(6)と主は呼びかけ給います。

「三人の人物、ノア、ダニエル、ヨブ」(14, 16, 18,  
20)は、義人の代表です。彼らがなぜ義人かと言  
えば、自分の心を神に明け渡したからです。  
言うまでもないことですが、彼らを信仰の偉人  
として崇めても、彼らが他人の心まで明け渡せ  
るはずありません。したがって問題は、自分  
の心を明け渡し、やってくる神の言葉をただ受  
けとめることに尽きます。「黙想は受け身だ」  
と言われます。たしかに、無防備な、ふとした  
瞬間に自作の言葉とは異なる言葉が、向こうか  
ら差し込むのです。やってくる自分の心とは異  
なる言葉にこそ、心を開きましょう。

主よ、心の偶像を捨て、ひたすらにあなたの  
言葉を待ちます。

## 9月17日(水) エゼキエル書 第15章

こうして、私が彼らに顔を向けるとき、あなたがたは私が主であることを知るようになる。(7)

イスラエルはしばしばぶどうの木にたとえられます(詩 80:9-14, イザ 5:1-7)。神の民として神の命につながり実りを生む、というたとえです。そのイスラエルが「背信の罪を犯した」(8)と言われ神と、つながって実りを生じさせる本来の使命から離れてしまったと言っています。実りの生じないぶどうの木は、他に使いようがありません。「その木から何かを作るために木材を取り出せるだろうか。あるいは、何かもののかける木釘を作れるだろうか」(3)と言われるとおりです。

それが薪として火に投げ入れられ、両端を焼き尽くすと言われます(4)。これは、二つの王国、すなわち北イスラエル王国と南ユダ王国のことを言います。この苦難を通して、ぶどうの木はいよいよ役に立たないものになるということです(5)。

しかし、そのことを通して「こうして、私が彼らに顔を向けるとき、あなたがたは私が主であることを知るようになる」(7)と言われます。神に顔を向け直し、背信から立ち帰る道を神はどこにでも備えてくださいます。

主よ、あなたにつながる道もまた、自分で準備できません。主イエスは「私はぶどうの木」と言われ、「私の愛に留まりなさい」と言われました(ヨハネ第15章)。どうぞ、あなたの愛で、私をつなぎ止めてください。

## 9月18日(木) エゼキエル書 第16章

しかし私は、あなたの若い日にあなたと結んだ契約を思い起こし、あなたと永遠の契約を立てる。(60)

長い章です。産みおとされ、処置されずにもがいていた赤ん坊が、助けられ立派に成長した。しかしやがて遊女よりもひどい有様になったと、イスラエルのことが寓話的に語られます。

そのように語られるのは、選民の誇りを砕くためです(15)。「あなたの出身、あなたの生まれはカナン人の地である。父はアモリ人、母はヘト人である」(3)は、そもそもエルサレムは異邦のカナンの土地だと言っていますし、アモリ人、ヘテ人も、カナン人のことです。したがって、エルサレムが神聖と見なされようとも、実際はその出生から特別な存在ではないと言われています。彼らを支えるのは、ただ神が自分たちを選ばれたこと、その恵みに与ったということだけです。さらにあの忌まわしいソドムやサマリアについて触れられ、イスラエルが「彼女たちよりも忌まわしいことを数多く行った」(52)と言われます。そこに福音が響き始めます。

「私は…ソドムと…サマリア…の繁栄を回復させる。また、彼女たちの中にいるあなたの繁栄を回復させる」(53)。救いは、全く神によるものです。ソドムもサマリヤもイスラエルも関係がありません。この恵みを示すために、イスラエルは選ばれたのです。その意味で「永遠の契約」(60)はびくともしないのです。

主よ、罪人が神の恵みによって救われる、ただこれだけと、心深く受けとめさせてください。

## 9月19日(金) エゼキエル書 第17章

私がそれをイスラエルの高い山に植えると、枝を出し、実をつけ、見事な杉になる。(23)

それぞれバビロンとエジプトを象徴する二羽の鷲が出てきます。登場するぶどうの木は、やはりイスラエルを象徴します。バビロンの鷲に連れ去られる若枝(イスラエル)は、成長します。一方、エジプトを象徴する鷲は、イスラエルを連れ去らず、むしろイスラエルがそちらに根を伸ばすと言われ、この木は成長しないと言われます。つまり、イスラエル自身が自ら選んでそちらに根を伸ばす彼らの能動的な選択にではなく、「連れ去られる」という、選択もできない出来事の中に、実は神の救いの歴史は繋がれているということです。

11 節以降は、当時の状況の説明です。一人の王(ゼデキヤ)は、バビロン王によって立てられた王でした。彼に求められたのは、「へりくだって、高ぶらず、その契約を守って存続する」(14)ことでした。しかし、彼は反逆します。自分でエジプトに支援を求めるのですが、エジプトは救いとはなりません。ゼデキヤは主の用意した救いに自らを委ねなかったのです。

「私がそれをイスラエルの高い山に植えると…見事な杉になる」(23)は、イスラエルの回復の預言です。これも、イスラエルの能動的な選択ではなく、植え給う神の活動によるのです。

主よ、恐れ悩む時に静まることが難しくありますが、どうか持ち運ぶあなたの御手にゆだねていることができますように。

## 9月20日(土) エゼキエル書 第18章

イスラエルの家よ、どうしてあなたがたは死のうとするのか。私は誰の死をも喜ばない。立ち帰って、生きよ。(31,32)

「父が酸っぱいぶどうを食べると、子どもの歯が浮く」(2)は、親の罪の結果を子が背負う因果を言うことわざです。その上で民が「主の道は公正ではない」(25)と言うのは、親も自分たちも罪を犯しておらず、神の仕打ちは不当だ、という主張です。神はエゼキエルを通して、因果でも何でもなく、人が神の戒めどおりに、その個人の責任を誠実であるのみだ、と言われます。親がどう生きたかではなく、あなたが今どう生きるかが問われます。

しかも、たとえ悪人であっても、立ち返って公正と正義を行うなら、必ず生きると言われます(21)。あるいは、逆に、どんなに正しい人であっても、その道からそれて悪に迷い込めば、かつての正義によっても救われないと言うのです。しかしそれでも、立ち返れば救われるという、神の恵みへの招きは尽きません。

つまり、神はどんな人でも立ち返ることを待っておられるのです。神は誰の死をもお喜びにはならないからです(32)。すべきはただ一つ、私が今、「すべての背きを投げ捨て、自ら新しい心と新しい霊を造り出せ」(31)と言われる神に立ち返ることです。神はそれを待っておられるのです。

主よ、ただ私のあなたへの心、それだけを求めてくださることを感謝いたします。心一つであなたに立ち帰ります。

## 9月21日(日) エゼキエル書 第19章

あなたは、イスラエルの指導者たちのために哀歌を歌い、言いなさい。(1、2)

エゼキエルは、イスラエルの現状を指導者たちに、母なる雌獅子イスラエルが育てた子獅子のたとえで語りかけています。もはや指導者はいないという哀歌になっています。

ここで言われる子獅子は二頭です。3 節の子獅子は、エジプトに連行されることからユダ王国衰退期の王ヨアハズとわかります。列王記下第 23 章 31 - 35 節では、彼は主の目に悪とされることを行っただけと言われます。本章で言われる獲物を引き裂き人を食らった(3)というのは、民を顧みない治世の比喻でしょう。わずか三ヶ月で治世は終わり、エジプトに連行されそこで死にます。もう一頭の若獅子(5)はヨヤキンで、前出のヨアハズと同じ言葉でその悪政が語られます(6)。彼の時代に第一次のバビロン捕囚となり、彼自身も捕え移されます。

本当はイスラエルは豊かで、力ある指導者を生み出せたにもかかわらず、もはや民を支える杖、すなわち指導者はいなくなったと、その悲しみが歌われます。

この一連のたとえでわかるのは、悪いのは周りの国ではなく、指導者が弱者を食い物にしたことだということです。残酷な統治は、哀歌を生む以外にはないと告げています。

主よ、この地にある悲しみからまことの統治を待ち望みます。どうか御国が来ますように。あなたの御心がこの地に行われますように。

## 9月22日(月) エゼキエル書 第20章

あなたがたは必ず私に聞き従い、二度と自分の供え物と偶像によって、私の聖なる名を汚すことはなくなる。(39)

「あなたがたが来たのは、私に尋ねるためか。私は生きている。私は…決して答えない」(3)と、尋ねるためにやってきた長老たちへの言葉が告げられます。彼らは身勝手に願うばかりで聞く気がありません。イスラエルの歴史がざっと振り返られます。「私の掟を与え、法を知らせた。人がこれを行うことによって生きるためである」(11)のに、しかしそれに従わず退けたという言葉が繰り返されます(13, 21)。掟は神のの温かな願いが込められている、生きる秘訣です。ところが、民はいつも神が応じようもない願い(31)を心に思い浮かべるのです(32)。その願いとは、わが子さえいけにえにして願うような、自分本位の願いです。自分の願いを正しいと思い込む人間です。ですから、願いは神の愛の掟に照らす必要を持っています。

「おのおの自分の偶像のもとに行き、これに仕えよ。その後、あなたがたは必ず私に聞き従い、二度と自分の供え物と偶像によって、私の聖なる名を汚すことはなくなる」(39)とは、偶像礼拝のくだらなさを心底知れ、ということですよ。神はご自身の愛と恵みに自信を持っておられます。嫌悪するべき自分に気付いて神の前に帰ってくる道を、神は備えてくださっています。

主よ、私の願う願いを、どうかあなたの御心に染め上げてください。

## 9月23日(火) エゼキエル書 第21章

悪に汚れたイスラエルの指導者よ、あなたの日  
が、終わりの刑罰の時にやって来た。(30)

主の剣はバビロンだと語られます。すなわち、  
バビロンによるエルサレムの陥落は、歴史の偶  
然ではなく、神によるものだと言われています。  
この決定がバビロン王の占いにも表れると言わ  
れます。「二つの道」とは、アンモン人の地ラ  
バとユダのエルサレムへの道です。その岐路で、  
バビロン王が小さな像（テラフィム、26）と動物  
の肝臓（26）の形で占うのですが、結果はエル  
サレムへの侵攻と出るというものです。こうし  
てやってくる滅びは過ち、背き、罪を明らかに  
し「あなたがたが思い起こすために」（29）だと言  
われます。主の民が罪を振るい落として生きる  
ようになるためです。

アンモンにもバビロンによる裁きがやってき  
ます(33 ～)。アモス書 1:13-15 が記すほどのア  
ンモン人の残虐行為ですが、その彼らがさらに  
残忍なバビロンの手に渡されると言われます  
(36)。神はバビロンをお用いにはなりますが、  
神が真実に目指し給うのは《剣を鞘に収めるこ  
と》(35)です。やがて主イエスが「剣を鞘に納  
めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる」と言  
われつつ、ご自身十字架にかかけられました。人  
が残忍さを拭い去るためには、御子を与えるほ  
どの神の愛を知る以外にありませんでした。

主よ、残酷さや冷酷さが私たちに絡みつく以  
上に、愛によって私たちを絡め取ってくださる  
あなたにこそ、目を注ぎます。



## 9月24日(水) エゼキエル書 第22章

私の前で石壁を築き、その破れ目に立ち、この国を滅ぼさないようにする者を…探し求めたが、見つけることができなかった。(30)

「私の前で石壁を築き、その破れ目に立ち、この国を滅ぼさないようにする者を、私は彼らの中から探し求めたが、見つけることができなかった」(30)。神の悲しみの声が響きます。かつてアブラハムが、ソドムに対する神の裁きの前に執り成したように(創 18:16 以下)、せめて「滅ぼさないでほしい」と神の前に立ちただかる人がいれば良かったのですが、誰もいません。「自分が良ければそれでよい」、みんなそう考えたのです。

特に問題は、指導者(6)、預言者(25)、祭司(26)、高官(27)などのいわばエリートたちです。彼らには、能力と権威・権力が与えられていました。しかしそれらの力は、自分のためではなく、寄留者、孤児、寡婦などの弱者に庇護を与えるという責任とセットです(7)。ところが、彼らは、自ら悦に入り、その力を私腹を肥やすために用いました(12,13)。権限を手中に収める指導者が間違うと、その悲惨も甚大です。指導者の特権は、他者、特に弱者に対しての重い責任と表裏一体なのです。一国の責任者もそうですが、私たちの日常生活の小さなグループについても、それは変わりません。

主よ、負わされた責任についての洞察を深くさせてください。賜物は、他者のために与えられていることをわきまえさせてください。

## 9月25日(木) エゼキエル書 第23章

彼らは憎しみをもってあなたを扱い、労して得たものをすべて奪い取り、あなたを丸裸にして捨て去る。(29)

「ユダが外国の勢力と同盟を結んだことが、細部にわたって、姦淫にたとえられる」(マクグラス)。姦淫にたとえられるのは、本来の正しい関係への裏切りだからです。本来は神へのみ依り頼むべきが、他に代えられたのです。

具体的には「私の聖所を汚し、私の安息日を汚した。その偶像のために自分たちの息子を屠りながら、その同じ日に私の聖所に来て、これを汚した。彼女たちは私の家のまさにその中でこのようなことを行った」(38, 39)というようなことが起きていました。自分の思うとおりの答えが、聖所では得られなかったというのが、その理由でしょう。自分の描く理想の救いの姿を手放さず、思い通りの答えを与えてくれる誰かを求めて彷徨ったのです。

十戒の第一戒は「あなたには、私をおいてほかに神々があってはならない」(出 20:2)と言います。要するに《神を神とせよ》なのですが、それが禁止令として語られるのは、人間にはいつも他の何かを神のようにしてしまう誘惑があるからです。主の日に、主の前にどっかと腰を据え、主にこそまなざしを向け、耳を傾けましょう。私たちを真に満ちたらせるものは、そこから来るからです。

主よ、心を定め、あなたに向きます。いのちがあなたにこそあることを教えてください。

## 9月26日(金) エゼキエル書 第24章

その日、逃れて来た者に向かってあなたは口を開いて語り、再びものが言えるようになる。(27)

エゼキエルは、バビロンによるエルサレムの滅びの日時を書き留めるように神に促されます。この十月十日のバビロンの襲撃は、被害が限定的な第一波でした。「良い肉片」(4) とは、この第一波をくぐり抜けた人々ですが、しかし、やがてやってくる災いは、さらに徹底的にエルサレムを滅ぼすことになると、エゼキエルは、先だって語ります。

15 節以降は、エゼキエルの妻の死が書かれます。妻の死というこの上ない悲しみは、やがてやってくる巨大な悲慘を指し示しています。喪に服する時にはサンダルを脱ぎましたから、それを履けというのは、喪に服するいとまもないほど、事態は切迫しているということを示します。「その日…あなたは…再びものが言えるようになる」(27)と言われますから、エゼキエルは悲しみのあまり言葉を失ったのでしょう。同じように愛する者たちを失って悲しみつつ逃れてくる者たちを迎える時に、彼は言葉を回復します。同じような悲しみを負った人々の慰めとして、《悲しみは主に覚えられ、主の言葉に書き込まれた悲しみ》だと告げるのです。この主の言葉のなかに慰めは聞こえてきます。

主よ、言葉を失う悲しみがあります。主に覚えられるゆえに、同じような悲しみに出会う人を慰めるための言葉にまで導かれますように。

## 9月27日(土) エゼキエル書 第25章

彼らは心の内で嘲りながら、昔からの敵意によって、滅ぼそうと復讐した。(15)

本章からイスラエル近隣の民らに対しての預言が語られます。共通して問題になっているのは、イスラエルの滅びを笑う“嘲り”です。アンモン人については「あなたはイスラエルの地に向かって、手を打ち、足を踏み鳴らし、あらゆる嘲りをもって心の内で喜んだ」(6)と言われ、エドムは「ユダの家に復讐を行った」(12)と言われます。さらにペリシテに対しては、「ペリシテ人は復讐を行った。彼らは心の内で嘲りながら、昔からの敵意によって、滅ぼそうと復讐した」(15)と言われています。意地悪な冷笑です。他者の不幸をどこか胸すくような思いでながめる態度です。ここで言われるような国同士の関わりのみならず、日常的な私たちの人間関係にも表れます。他者の悲しみを悲しみとして受けとめられない心です。

こうした心を神がお裁きになるのは、そうした復讐や冷笑で胸すく思いを味わったところで、そこからは何も生まれないからです。神がお求めになるのは、憐れみです。しかし、人はこの憐れみを本当の意味では知りません。だからこそ、誰かの悲惨を嘲らず、そこに憐れみのうちに裁いておられる神を見抜く必要があります。

主よ、残酷な喜びから私を分け隔ててください。あなたの憐れみのうちに私を保ってください。

## 9月28日(日) エゼキエル書 第26章

こうして

彼らは私が主であることを知るようになる。(6)

ティルスに対しての預言が、本章と次章に渡って語られます。ティルスは、地中海に面したよい港のある国で、交易で大変栄えました。その街がバビロンに滅ぼされてしまうとされています(7以下)。そのさまを見て、周りの人々は「どうしてあなたは滅びて海から消えてしまったのか。かつて海で強かった、ほめたたえられた町よ」(17)と言います。

バビロンは、外国であって主を知らない民ですが、この民が、摂理の神の御手の中でティルスを滅ぼすために用いられます。傲慢なティルスが、さらに傲慢なバビロンによって滅ぼされるのです。そして傲慢なバビロンもやがて滅ぼされます。《驕る者久しからず》という、歴史の軸がここに現れます。しかし、隠されたもう一つの、より強力な軸を、エゼキエルは言います。それは「こうして彼らは私が主であることを知るようになる」(6)です。人間の傲慢さとそれが生む悲惨さを、主はつなぎ合わせつつ、摂理の御手で歴史を進めなさいます。そして、その主の御手は、今のこの時代の中にも、さらに私たちの個々の人生の中にも、働き続けておられます。

主よ、背後で救いへと確実にことをお進めになっておられるあなたにこそ、信仰のまなざしを向けていることができますように。

## 9月29日(月) エゼキエル書 第27章

漕ぎ手があなたを大海原に連れ出したが  
海の真ん中で、東風があなたを打ち砕いた。(26)

交易で栄えた港町ティルス（テールス）の哀歌が続きます。前章 13 節の「騒がしい歌」が止んで、むしろまわりがこのティルスの滅亡を悲しんだり、嘲ったりするということです。なぜ「美しさの極み」(3)であったこの町が滅びてしまうのでしょうか。4 節以降にその答えを見ることができます。

この海に突き出た小さな港町が、セニル（ヘルモン山）の糸杉、レバノンの杉、バシヤンの櫟の木、キティム（キプロス）の糸杉などの贅沢な材料で造られた豪華な船にたとえられます。それらはティルスが扱った品物です。小さな港町でしたが、行き交う諸外国の富で豊かになったのです。その様子が、「エジプトの彩り豊かな上質の亜麻布が／あなたの帆となり、旗となった」(7)とされています。

ところが、それこそがこの町の滅びにつながります。「東風」(26)はバビロンの脅威です。ティルスが向き合った外国からは、富と同時に、滅びもやってきます。預言の通り、波に翻弄された小舟のティルスは、紀元前 572 年バビロンによって沈められます。それ以後、かつての栄光を取り戻すことはありませんでした。

主よ、本当の豊かさは、あなたからやってくることを忘れることがないように、私の信仰をお守りください。

## 9月30日(火) エゼキエル書 第28章

しかし、あなたは人であって、神ではない。自分の心を神々の心のように思っているだけだ。

(2)

ティルスがバビロンに滅ぼされるという預言が続きます。ティルスの君主は「私は神だ。海のただ中にある神々の住まいに住んでいる」(2)と豪語します。歴史を調べると、港町ティルスについて、君主がその首都を拡大し、すでに町があった二つの小さな島を埋め立ててつなぎ、異教の神々の華麗な神殿と広場を造ったことがわかります(新聖書辞典、ことば社)。ですから、この君主は自分を、海の上に支配権を広げる賢い神のようだとうぬぼれたのです。当時すでに外国にも知れ渡る知者「ダニエルよりも知恵があり」(3)と豪語するほどです。

傲慢な君主に対して「私は諸国民の中で最も凶暴な他国の民をあなたに差し向け…あなたの知恵の美しさに向かって剣を抜き、あなたの輝きを汚し…あなたは海のただ中で刺し貫かれて死ぬ」(6-8)と言われます。海の上に神殿を築くのは、不安定な曲芸のようなものです。自分のわざで一瞬ひねり出せたとしても、情勢が変われば一気に消え去ります。彼は「あなたは自分を殺す者の前でも『私は神だ』と言い張るのか」(9)と問われます。《人は支えそのものを、逆立ちしても作り出せない》という厳粛な真理を、彼は自己神格化のうぬぼれの中で忘れた、そう言うことができるでしょう。

主よ、命はあなたに拠ることを知る、まことの知恵に生きられますように。